

# 一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中部支部 2023年度 第2回定例研究会プログラム

日時：2024年3月2日（土）13時00分～16時15分

会場：名古屋市立大学 桜山(川澄)キャンパス 医学部研究棟 II階 講義室 A

オンライン同時配信も開催します(Microsoft Teams)

参加方法：JACET 中部支部ホームページ (<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>) より、  
事前に参加申し込みをお願いします（参加無料）

開会挨拶 13時00分～13時05分 支部長 鎌倉 義士（愛知大学）

【研究発表・実践報告】 司会 内田 政一（桜花学園大学）

実践報告 13時10分～13時40分  
小学校教員養成課程での英語に対する意識改善と英語運用力  
澁井 とし子（東京福祉大学）

研究発表 13時45分～14時15分  
Examining the Role of Study Abroad Experiences in Fostering Global Human Resources:  
A Survey of Multinational Firms  
Miori MOTOMORI（Chukyo University/ Nagoya University graduate student）

【研究会研究発表】 14時20分～15時05分

【最新言語理論に基づく応用英語文法研究会】 司会 大森 裕實（研究会代表）

① 英語移動構文・結果構文の考察と英語教育への含意  
都築 雅子（中京大学）

② メンタルユニバース・グラウンディング理論と文法教育への示唆  
今井 隆夫（南山大学）

講演 15時10分～16時10分 司会 大森 裕實（愛知大学）  
大規模言語モデルによるテキストの文法性はどこからきているのか？  
—言語学の観点から考える Self-Attention—

長谷部 陽一郎（同志社大学）

閉会挨拶 16時10分～16時15分 副支部長 今井 隆夫（南山大学）

## 発表概要

実践報告 13時10分～13時40分

小学校教員養成課程での英語に対する意識改善と英語運用力  
Improvement of Consciousness about English and English Proficiency  
at Elementary School Teacher Training Course

澁井 とし子 (東京福祉大学)

小学校教員を目指す学生を対象に教職課程の授業という限られた授業時数の中で学生の英語苦手意識を軽減し、英語の楽しさを知ってもらい、自ら英語を学びたいと思える意識づけを行うことを目的に約1年間の研究を行った。大学では O'Malley & Chamot (1990) のメタ認知方略と社会・感情方略を使用した授業を行い、学生の英語学習の動機づけと自己効力感の変化を学期開始時と最後に質問紙調査を行い比較した。また、毎回の授業の振り返り記述から学生の気持ちの変化を追った。結果として、英語への不安はかなり軽減され、授業の回数を重ねるたびに「英語は苦手のままだが、勉強したい。」と思える学生が増え、教員から強制しなくとも自分の為、児童の為に英語を勉強したいと感じるようになった。しかし、学生の意識改善を行うことはできたが、自分でどのように英語を学んだら良いのかが不明確である点と実際に授業で行うスモールトークに関しては、英語運用力の更なる向上が課題として残った。そのため、来年度は今回の取り組みを改善し、授業内に学生の語彙力、文法力、作文力を上げる為の工夫された教員のサポートが必要であるという点が明らかになった。

研究発表 13時45分～14時15分

Examining the Role of Study Abroad Experiences in Fostering Global Human Resources:  
A Survey of Multinational Firms

Miori MOTOMORI (Chukyo University / Nagoya University graduate student)

Global Human Resource (GHR) development in Japan has been a central focus, facilitated by industry-academia partnerships to foster GHRs that align with industry needs. Despite the acknowledged significance of study abroad experiences (SAE) in these initiatives, the assessment of SAE's impact on GHR attribute development has been limited. This study conducted a questionnaire survey of 300 multinational firms headquartered in Aichi Prefecture and collected 84 responses. The questionnaire aimed to evaluate whether and to what extent employers perceived employees' SAE before employment as contributing to developing GHR attributes. Inquiries covered decisions related to recruitment, deployment, remuneration, and assessing employees with pre-employment SAE. Respondents were queried on their efforts to increase the recruitment of applicants with SAE, their evaluation of employees with SAE, and the utilization of such individuals during onboarding and beyond. The findings reveal a notable recognition among respondents that employees with pre-employment SAE demonstrate strengths. In addition, these strengths extend beyond language proficiency and cross-cultural understanding, encompassing fundamental competencies of working persons. However, the number of firms actively increasing recruitment efforts for applicants with SAE was limited. Moreover, certain

participants clarified that they do not actively seek out candidates with SAE, emphasizing non-discriminatory treatment from other applicants. Analysis of the follow-up interview results highlights an inclination towards prioritizing the desired profile of candidates in the context of batch hiring of fresh graduates. While possessing SAE does seem to influence the evaluation process, hiring decisions are not solely based on having SAE. This paper explores the implications of these findings for university educators and discusses strategies for enhancing curriculum design to better equip students with industry-desired skills.

研究会研究発表 14時20分～15時05分

**【最新言語理論に基づく応用英語文法研究会】**

司会 大森 裕實（研究会代表）

本発表では、2つの言語研究分野——「語彙意味論」と「認知文法」に基づく知識と発見から、従来の学校文法(学習文法)では一面的に捉えられる文法現象や構文に対して、多面的アプローチによる説明とその導入の可能性を攻究する。

① 英語移動構文・結果構文の考察と英語教育への含意

都築 雅子（中京大学）

語彙化のパターンが英語と日本語では異なることがこれまでに指摘されてきている(Talmy 2000 など)。日本語との違いが顕著に表れる英語の移動構文と結果構文を考察し、英語教育への含意を述べたい。

② メンタルユニバース・グラウンディング理論と文法教育への示唆

今井 隆夫（南山大学）

メンタルユニバースとグラウンディング理論 (Langacker 2008 など) の考え方から、学習英文法の従来とは異なる1つの型を提示する。be 動詞を含む文の分類、現在完了、未来完了、仮定法過去といった文法項目について、be 動詞構文、事実、予測、非事実の観点から整理し直すことができることを具体例として示したい。

## 講演概要

15時10分～16時10分

### 大規模言語モデルによるテキストの文法性はどこからきているのか？

#### —言語学の観点から考える Self-Attention—

長谷部 陽一郎（同志社大学）

本講演では、ChatGPTをはじめとする生成 AI が、人間の目から見ても十分に自然と感じられる「文法的」なテキストを出力できるのはなぜかという問題を取り上げ、この問題が工学分野としての自然言語処理だけでなく、人文系の学問分野としての言語学においても興味深いものであることを論じる。生成 AI の背後にある大規模言語モデルを考えるにあたっては、Transformer および Self-Attention について知ることが重要になる。Transformer とは簡単に言うと、文脈に基づいて次に来る単語を予測する仕組みであり、Self-Attention は、文脈に含まれる種々の情報の中で何に着目すべきかを判断する仕組みである。これらは本質的に工学的なモデルだが、詳細に見ていくと、認知言語学で提案されている様々な理論的概念 (schema, construction, base/profile) と一致する箇所が見出される。また、コーパス言語学におけるいくつかの概念 (frequency, collocation, semantic prosody) との関連も見受けられる。現在、ChatGPT やその他の生成 AI システムが社会の様々な領域に導入されようとしている。工学的な仕組みの大枠を理解し、人間の言語の背後にある認知的なモデルとの接点を見出すことは、この革新的な技術を言語教育の場で効果的に用いるための基盤になると思われる。

#### 【講師紹介】

長谷部 陽一郎 (はせべ よういちろう)

京都大学人間・環境学研究科博士課程修了。博士(人間・環境学)。現在、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部教授。専門は認知言語学およびコーパス言語学。言語研究と言語教育に資するコンピュータ・システムの開発にも従事する。

#### (主な業績と活動)

「コーパスと英語学—認知言語学的観点から」『コーパス研究の展望』石川慎一郎他(著) 2020. 開拓社.

「コーパスを利用することで認知言語学にとって何がわかるだろうか?」『認知言語学とは何か—あの先生に聞いてみよう—』高橋英光他(編) 2018. くろしお出版.

TED Corpus Search Engine (英語講演テキスト検索システム) <https://yohasebe.com/tcse>

Monadic Chat (音声対話チャットボット開発システム) <https://yohasebe.github.io/monadic-chat>

会場のご案内：名古屋市立大学 桜山(川澄)キャンパス 医学部研究棟 11階 講義室 A

〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1

<https://www.nagoya-cu.ac.jp/campus-map/sakurayama/>



2023年度第2回定例研究会(3月2日)

参加申し込みサイト

<https://forms.gle/kve2eyEbGJ2XSEJF8>

## 事務局からのお知らせ

- ☆ 2024年度 中部支部 英語教育フォーラムを6月1日(土)に愛知大学にて開催予定です(オンライン配信も同時に開催)。講演およびシンポジウムを企画しています。
- ☆ 2024年度 第1回定例研究会(11月30日(土)、静岡大学静岡キャンパス)、および第2回定例研究会(2025年3月1日(土)、南山大学)の研究発表申し込みに関する詳細は、追って中部支部ホームページ(<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>)にてご案内いたします。どうぞ皆様、日ごろの研究成果をご発表いただけますようお願いいたします。

お問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

支部事務局：静岡大学 大瀧綾乃研究室内

otaki.ayano@shizuoka.ac.jp